

小さな幼稚園



福 西 基

家族的なあたかさ

登園時の八時十五分頃には、担任はみな門のところで園児を待っています。先生からかける「○○ちゃんおはよう」というあいさつに、子どもの元気なあいさつがかえってくる時もありますが、無言で行きすぎる恥ずかしがりやの子もいます。

先生はどの子の名も顔もわかっているのみでなく、その子の性質も、担任がどんなに苦しんで保育にあたっているかも知りな知っています。園児とばかりではありませんで、母親との交流も同様です。クラスの母親の顔や名ばかりではありません。全園児のおかあさんとのあいさつがあり、話し合いもあります。百十九名みんな自分のクラスの子であり、母親です。先生の縁談にまで心配してくれます。

ホンモノを目ざして

人口三万弱の田園都市の中心部には、私立三園、周辺部には

公立五園もあり、その上に公立私立の保育所が各一、無認可の幼稚園か保育所かわからぬもの二園もあるこの環境に、そんな大規模の園を考えるよりは、本質的な保育を念じた方がよいことは明らかで、私自身、ますますこの小さな幼稚園のよさを何処に求めるかの探究に、心を痛めるようになりました。

私のところでは、形式的なことよりは、子どものあそびを重視し、制約的な時間割配当もなければ、教育要領の要素を無理にねらいに組み入れて保育し、達成度を競うこともありません。放任のような形をとっていますが、保育者がよい幼児観、幼児教育観をもつことと、求道の意欲があれば、不安はないと信じます。不安のあるのは母親で、それに対しては年六、七回の父母教養講座で研修してもらっています。

こんなことのできるのは、小さい幼稚園ならばこそです。

苦難をこえた喜びの味

小さな幼稚園といっても、経営を考えねばなりません。ある

年は全園児四十五名、三クラス、園長外三名の教員というところもありました。現在は三歳から五歳児まで百十九名の園児を五クラス、園長と六名の教員で保育にあたっていますが、事務員とか養護教諭とかを配置する余裕もありませんので、担任外一名の教員を相手に、園長は謄写の原紙がきから印刷をはじめ、蔵書千余冊の絵本の、週二回の貸出しから修理製本にいたるまで、しなければなりません。

それならばクラスの定数を四十名にしてとの反論もありましたが、本園はクエーカーの信仰のあかしとして、一婦人によって創立されたもので、その建学の精神——子どものうちには神のたまものやどつていて、今も神はこのたまものに大いなる働きをくださることを信じ、まわりからお助けすることが保育であり、それを果たす場こそ幼稚園である、との祈りをこめて創立されたもので、私も一友会徒として、信仰を持って継承しています。この使命を果たすためには、少数の園児のクラス、全体としても百名から百二十名、五クラスあたりになるわけです。そんなために、毎年赤字が続きますが、神は必要ならばそれを満たしてくれるという恵みを体験しております。この感謝に加えて、思わぬ時に先生がたを喜ばしてくれる母親の自然に湧き出る物心両面の助けがあります。

悩みもあります

私共の園は五十年の歴史を持っていますが、それだけに園舎は古いし、現行設置基準を満たすこともできません。

教員の待遇にしても、短大卒有資格者七万三千円の初任給、期末手当三か月分という中卒並のものです。

幼稚園教育要領で総合的保育などいっていても、養成機関は個々バラバラの教育で、卒業するとそれだけの知識で十分であると考える探求心のない教員などがありますが略します。

おわりに

ある席上で、他の幼稚園に子どもを通園させている公立学校時代の教え子が、こんな話をしてくれました。

「ある子の親が『小学校五、六年になって上位の成績にいるのは、『小友』の子が多いんだって。一、二年の時は目立たないが、何故か学年が進むにつれてよくなるんだそうだ』と話しているのをきく」というのです。

全く私共の知らないところでこんな話がされるとは、こんな喜びはありません。多年の念願である小数定数の保育の結実の姿ではないかと意を強うするものです。（下妻小友幼稚園）